

二〇一九年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから14ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

優太とモー次郎(山田)は将棋部員だが、優太の担任で水泳部顧問のウガジンに無理矢理水泳部に入部させられている。水泳部には県の記録保持者である姫(岡本)がいるが、練習にも出ないし、水泳部をやめたがっている。

ほくは小学校のとき、サッカー部に入っていた。自分で言うのもなんだけれど、足が速かったし、ドリブルやフエイントが得意だったので、フォワードとしてけっこう活躍していたのだ。四年生のときには異例の早さで地域選抜の選手に選ばれた。美里北小の長谷川優太の名前は、同じ村の美里南小のやつらにはもちろん、よく練習試合をしていた海王市の小学校のサッカー部にまで知れ渡っていた。

中学に進んでからは、迷わずサッカー部に入った。ちょうどそのころ、自分でもびっくりするほど身長が伸びたので、これからはきつと当たり負けしなくなるだろうし、足だつてもっと速くなるだろうと楽しみにしていた。

ところがだ。なぜかわからないが、急にサッカーがへたくそになった。ボールを蹴るといふ簡単なことさえ、きち

んとできなくなつた。足の甲でボールをとらえようとしてゐるのに、トウ・キックになつたり、ボール手前の地面を蹴つたりしてしまうのだ。リフティングも回数が減つてしまった。ドリブルをすればボールが足についてこない。フエイントをかければ軸足がふらふらとした。

まるで、両足が自分のものではないかのようなだつた。誰かの足でボールを蹴っているみたい。それはボールタッチの瞬間に特に感じた。ボールに足が触れるその一瞬、奇妙なタイミングのずれがあつたのだ。

でも、この感覚をわかってくれる人は、周りに誰もいなかった。

「とにかく努力が足りないんだよ」

サッカー部の顧問の先生に、いらいらした口調で言われた。努力だとか根性だとか全力だとかの言葉をすぐに持ち出すこわいオッサンで、ほとくの小学校時代の活躍を知っているだけに、期待はずれとがっかりしているようだつた。

ほくだつて悔しくて努力はした。以前よりたくさん練習した。けれども、ぜんぜんうまくならなかつた。それどころか、いつもいつも蹴っていたサッカーボールが、まるで別のボールに変わってしまったかのような気がしてきた。

ボールコントロールがうまくいかない。ぼくはフォワードの練習メンバーからはずされた。デイフェンダーへのポジシオンチェンジを言い渡された。屈辱くつじやくだった。

「体力が落ちてきて、足腰あしこしがついてこないんだろ」

顧問の先生にそう叱しかられて、ドリブルの練習を大幅おほはばに増やした。フェイントも元のようにできるように、細かいステップワークの練習を何種類もやってみた。とにかく、ボールに触さわっている時間が長ければ、以前の感覚を取り戻せると思った。練習量は前に比べて三倍くらいになった。

しかし、夏休みのある日のことだ。左膝ひざが痛くなって動けなくなってしまった。感電かんでんしたみたいにジビッと鋭すみどい痛みが全身に走って、呼吸こそさえできない状態じょうたいだった。無理に体を痛めつけすぎて膝を壊こわしてしまっただ。訪ねていった整形外科の先生からは、運動は当分あきしないようにと止められてしまった。最低でも三ヶ月の休部きゅうぶが必要だと言われた。

ぼくはサッカー部をやめた。膝はいつか治るかもしれない。復帰ふきできないことはない。しかし、サッカーに挑戦ちようせんする気持ちをなくしてしまったのだ。

たとえば膝が完璧かんぺきに治っても、ボールを蹴る瞬間しゅんかんのあの姿

なずれが治るとは限らない。ということは、再びハードな練習をしなくちゃならない。それに、そのズレがなくなつて、小学校のときのようなキレのあるドリブルやフェイントを取り戻せたとしても、そのころにはきつとチームメイトたちはもつと上達じやうたつしている。ぼくがレギュラーになれる可能性は低い。どうせ駄目だめなのに努力どりょくをするのはもういやだと思った。

なにより、部の先輩せんぱいや同級生たちから、長谷川優太なががわゆうたって小学校のときはもつとうまかったよな、という目で見られるのはもうたくさんだったのだ。

「ほら、優太くん。もうちょっと速く走ろうよ」

隣となりを走るモー次郎もろじろうに言われた。

「膝が悪いから速く走れないんだよ。だから将棋部しょうぎぶに入ったんだろうが」

「その話は何度も聞いたよ。でも、いくら何でも遅おそすぎだよ。それに、膝が悪かったのは一年の時のことなんでしょ。いまはもう治なってるかもよ」

むつとしてモー次郎の尻しりを蹴り上げた。

「い、痛いな。なにするんだよ」

<sup>B</sup>「お前おまえがよけいなこと言うからだよ」

「どこがよけいな。ぼくは優太くんの膝が治ってるなら、それはそのほうがいいと思って」

「無理なもんは無理なんだよ。速く走りたいんだったら先  
行けよ」

ぼくはもう一度蹴るふりをした。

「わかったよ。変なの」

モー次郎は膨れっ面をして、どすどすと先へ走っていった。

実はいま自分の左膝の状態がどんなふうだかわからない。もしかしたら治っているのかもしれない。けれど、治っているかどうか確認するために全力で走ったことがない。

どうせなら、膝なんて治らなくていい。正直に言えば、またサッカーができる状態に戻りたくないのだ。

大好きで、あんなにも得意だったサッカーで、わざわざ負けを認めるためにサッカー部に戻るのはいやだ。だから、僕はまだまだ膝が悪いふりをして、誰とも勝負をしないで中学生生活を終えることにした。いまでも左足にはサポーターを巻いたままだ。体育の授業もほとんど見学している。お昼休みのサッカーやバスケットにも参加しない。水泳

部の練習もゆるゆると泳いでいるだけ。走ったとしても、歩くのと変わらないスピードしか出さないと決めている。

ときどき、かわいそう、とクラスの連中に見られることもある。

でも、それでもいい。

ぼくは膝が悪い。だからもうサッカーはできない。そう思うことでぼくは傷つかなくてすむ。本気でやって負けたわけじゃない。だから、本気で悲しまなくてもいいのだ。

「いったいおまえは、どういうつもりでそんなことをしてるんだ！」

プールの入口まで戻ると、ウガジンの怒鳴り声が聞こえた。びっくりしてモー次郎と顔を見合わせる。おそるおそるプールサイドに行ってみると、ウガジンと姫が間近で向かい合っていた。

ウガジンは怒りの形相だ。両手を腰のあたりでぎゅっと握り、いまにも殴りかかりそうだ。なにをあんなにも怒ってるんだらう。対照的に、姫はへらへらと笑っている。なんだかやばい雰囲気だ。

「もう一度訊くぞ。おまえは、どういうつもりでそういう

ことをしてるんだ」

「そんなに深い意味があつてやったわけじゃないつすよ。ちよつとかつこいいかなあつて思つて」

姫が笑いながら髪を掻き上げた。耳があらわになつて、耳たぶに赤いピアスが見えた。小さくてキラキラとした石だ。ガーネットだろうか。

「ありやー」

モー次郎が緊張感のない声をあげる。ウガジンと姫がぼくらに気がついた。姫はうんざりとした目つきでこちらを見る。助けてくれよ、と訴えてきていた。

「岡本。ちゃんとこっちを向け」

ウガジンがまた怒鳴る。姫は渋々前を向いてから言った。

「わかりましたよ。取ればいいんでしょ、取れば」

姫がピアスはずそうとする。

「そういうことを言ってるんじゃないんだよ。自分がたったひとりの正規の水泳部員だつて自覚はなかったのかつて訊いてるんだ」

「正直に答えたほうがいいですか」

「なにい？」

「いや、正直言えば、ぜんぜんなかったんで」

「お、ま、え」

ウガジンの顔が鬼の面のように変わった。だが、必死に怒りをのみ込んだらしい。一度がつくりと肩を落としたあと、穏やかな表情でこわいくらい静かに言った。

「なあ、岡本。おまえのために水泳部を残したんだぞ。学校の反対を押しきつてな。それなのにおまえは……」

姫は困つたような笑みを浮かべた。

「おれだつて先生には感謝してますよ。水泳しか取り柄がないおれなんかのために、水泳部を残してくれて。でも、それと、これとは関係ないじゃないですか」

ふたたび髪を掻き上げてピアスを見せた。ウガジンは目をつぶつて首を振つた。

「見せなくてもいい。わかつた。岡本の気持ちがよくわかつたよ。おれの気持ちがわかつていないってこともよくわかつた」

「先生……」

「学校にはピアスのことは黙っておいてやる。学校に来るときは必ずはずしてばれないようにしてこい」

「はあ……」

「いいな」

「はい」

「だけどな、岡本。おまえ、水泳部はクビだ」

重苦しい沈黙に包まれた。

「またまた冗談を」

笑おうとした姫をウガジンが制する。

「本気だ。もうお前は練習に来なくてもいい。それから、優太も山田も将棋部に戻っていいぞ。おまえらを巻き込んで悪かったな」

ウガジンは無表情のままぼくらに言った。うれしいはずなのに、悲しい気持ちの胸の奥で揺れた。なんだかウガジンがかわいそうだった。飼犬に手を咬まれるという言葉は、こういうときにふさわしくないかもしれないけど、選手として大切に育ててきた姫に、あっさり裏切られるなんて同情せずにはいられない。見ていられなくて、ぼくは思わず目を伏せた。

ところが、モー次郎が場ちがいなよろこびの声をあげた。

「ほんとですか！ もう水泳部に来なくていいんですね。やったあ！」

E  
はしやぎ声にめまいのようなものを覚えて、モー次郎の尻に強烈な蹴りを見舞ってやった。すぐに耳打ちする。

「よろこぶところじゃないだろ」

「なんでさ」

モー次郎が睨んでくる。ほんとに空気の読めないやつだ。

ウガジンが呆れきった視線でぼくらを見てから、姫に向きなおった。

「岡本。おまえは泳ぐことにかけて本当に才能があるよ。

でもな、いくら才能があっても心がついてこない人間おれは認めない」

とどめの一撃だと思った。もしくは、ウガジンにとって勝負のひと言だ。もしこれで姫が心を改めなければ、もうあきらめる。そんなふうに関こえた。

「先生。すいません。おれクビなんていやです」

F  
反省したのか姫はぼそぼそと言った。ぼくはほっとした。ウガジンの表情もやわらいだ。その口元がほころんでいるように見える。ウガジンだって本心では姫をクビになんかしたくないはずなのだ。ふたりはいままで二年あまり、二人三脚で水泳を続けてきたのだから。

これにて一件落着だ。あとは姫が頭を下げるだけだ。しかし、空気の読めなかったモー次郎を、どうやって叱ってやろうか考え始めたそのときだ。姫がふやけた笑みを浮かべて、思いもしないことを言った。

「クビはやめてくださいよ。こんなしょぼい水泳部をクビになったなんてみんなに知られたら、かっこ悪いじゃないですか。おれからやめたってことにしてください」

「お、お、岡本！」

声は雄叫びおたけに近かった。もしすぐそばに巡回じゆんかいに出ている警察官がいたら、すぐさま飛んできただろう。

「岡本。おまえて人間が、よくわかったよ」

「最後の最後ですが、先生にちゃんと理解してもらえて光栄です」

「ふざけるな！」

ウガジンはそばにあったパイプ椅子いすを蹴り飛ばした。パイプ椅子はアルミ製のコースロープの巻取器に当たって、

けたたましい音を立てた。モー次郎が亀かめのように首をすくませる。

「解散！ 水泳部は解散だ。おまえら勝手にしろ！」

<sup>G</sup>怒鳴り散らすウガジンと目を合やすこともできない。ほくは必死にプールサイドのコンクリートを見つめ続けた。すると、ウガジンはぼくらのわきを通って校舎へと戻っていった。

（関口尚『空をつかむまで』による。なお、問題文の一部を省略している。）

#### 【注】

\* 姫——岡本は男子生徒だが、授業中に歴史上の女性の物まねをしたことが評判になり、「姫」というあだ名がつけられた。

\* ガーネット——宝石の一種。

問一——線部A」とにかく努力が足りないんだよ」とあるが、サッカー部の顧問の先生がいらいらしてこのように言った理由を説明しなさい。

問二 ——線部B「お前がよけいなこと言うからだよ」とあるが、優太はなぜ「よけいなこと」と言ったのか。この時の優太の気持ちを考えて、その理由の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けがでサッカーが出来なくなった自分に対して、友達ぶって同情的な言い方をしてきたモー次郎のことを煩わしく感じたから。

イ 自分よりも明らかに運動能力が劣っているモー次郎から、自分の足が遅いことを馬鹿にしたように言われたので、癢しびに障さわったから。

ウ モー次郎が優太のことをわかっているような生意気な口をきき、さらに反抗はんかう的な態度をとったことにプライドを傷つけられたから。

エ 以前のようにサッカーができない悔しさを抱え、目を向けないようにしているのに、モー次郎がそのことを話題に出して腹が立ったから。

問三 ——線部C「どうせなら、膝なんて治らなくていい」と思っている理由について説明した次の文章を完成するよう  
に、次の①～④の空欄くうらんを埋めなさい。

膝が治れば ① ことが出来るが、すると ② が明らかになり、得意なサッカーで ③ ことになる。  
しかし、膝が悪いふりをするので ④ から。

問四 ——線部D「うれしいはずなのに、悲しい気持ちこころもちが胸の奥で揺れた」とあるが、(1)「うれしい」理由と、(2)「悲しい」理由を説明しなさい。



問五 ——線部Eで優太が「めまいのようなものを覚え」たのは、優太がモー次郎のことをどう思ったからか、文中から十字以内で抜き出しなさい。

問六 ——線部F「ウガジンの表情もやわらいだ」とあるが、なぜやわらいだのか、説明しなさい。

問七 ——線部G「怒鳴り散らすウガジンと目を合わすこともできない」とあるが、優太がウガジンと目を合わせられないのは、この時ウガジンに対してどのような思いを抱いているからか、七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある日、大学の構内にあるベンチに二、三人の男子学生が坐<sup>すわ</sup>って話をしていた。そこを通りかかった私は、彼<sup>かれら</sup>等の足下<sup>あしもと</sup>や目の前の地面に、ジュースの空カンがいくつかが転がっているのを見て、すぐ拾<sup>ひろ</sup>ってベンチの横にある空カン用の鉄製の籠<sup>かご</sup>に入れ始めた。学生たちは無表情に私のすることを見ている。

そこで私は「君たちも拾<sup>ひろ</sup>ったらどうだ」と声をかけてみた。すると学生の一人が、「私が捨てたんじゃありません」と言うではないか。私は「いや別に君が捨てたと言っているわけじゃないよ。でもここは自分の大学だろ。誰<sup>だれ</sup>がうっかりカンを踏<sup>ふ</sup>めば、転ぶこともあるだろうし、第一あたりに花が咲<sup>さ</sup>いていたりしてせっかく綺麗なキャンパスなのに、空カンがゴロゴロしては汚<sup>よご</sup>いと思<sup>おも</sup>わないのかね」と言<sup>い</sup>ってみた。学生たちは渋<sup>しぶ</sup>い顔をして立上<sup>た</sup>り、それでも一つずつ拾<sup>ひろ</sup>って籠<sup>かご</sup>に入れ、黙<sup>だま</sup>って立去<sup>た</sup>って行<sup>い</sup>った。その時私は、はっと気がついた。この若者たちは自分たちの学校にしながら、そこが自分たちのもの、だという意識がない。〔 1 〕大切にしようとか、綺麗<sup>きれい</sup>にしておこう

という気持が湧<sup>わ</sup>かないのだと。これが自分の家、自分の部屋であつたらどうだろう。彼等でも飲みさしのジュースカンや汚<sup>よご</sup>いものを、そのまま放<sup>はな</sup>つてはおかないと思う。玄関<sup>げんかん</sup>さきや庭<sup>にわ</sup>の中に、たとえ自分がしたことでもなくても、カンやゴミが投げ捨ててあれば、文句を言いながらも片付けるに違<sup>ちが</sup>いない。それなのに自分がわざわざ望<sup>のぞ</sup>んで入学<sup>にがく</sup>した大学、高い月謝<sup>げつせ</sup>を払<sup>はら</sup>い、毎日授業に出<sup>で</sup>て、やがて卒業すれば母校となる筈<sup>はず</sup>の自分の大学に対して、自分の家と同じに自分のものという気持がないのは、何とも不思議だ。若者たちに、A と思う気持を起<sup>おこ</sup>させるにはどうしたらよいのだろうか。それには、愛校心<sup>あいこうしん</sup>をもてとか、環<sup>かん</sup>境<sup>きやう</sup>を美しく住<sup>す</sup>みやすいものにしよと呼<sup>よ</sup>びかけるとか、公德心<sup>\*こうとくしん</sup>をもつと養<sup>やしな</sup>うような教育<sup>きやう育</sup>を小学校からしなくては駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>だとか、いろいろと考<sup>かん</sup>えられるだろう。

しかし私はこのような道徳<sup>だうとく</sup>的な、どちらかといえば他<sup>た</sup>利<sup>り</sup>的な目標<sup>もくひやく</sup>に向<sup>むか</sup>つて教育<sup>きやう育</sup>するよりは、私たち人間にとつてもっと自然<sup>しぜん</sup>な、自分の利益<sup>りやく</sup>に結<sup>むす</sup>びつけて考<sup>かん</sup>えさせる方が、むしろ良<sup>よ</sup>いのではないかと思<sup>おも</sup>いだした。

それはもつと「欲<sup>ほ</sup>深<sup>こ</sup>くなれ」と説<sup>と</sup>くことである。言<sup>い</sup>う迄<sup>まで</sup>もなく、誰<sup>たれ</sup>でも自分の物は大切<sup>たいせつ</sup>にする。そして誰<sup>たれ</sup>にも、いま

持っている物より多くの物を持ちたいという欲がある。もっと広い家が欲しい、もっと多くの土地があればと思わない人は少ないのではないか。だから所有の対象、欲望の限度を狭く制限する禁欲的な教育や物の見方を止めて、いっその大学全部が自分のものだ、町も村も自分のものだ、次々に所有の対象を拡げていくのだ。

〔 2 〕自分の自由にならないものを勝手に自分のものだと思っても、それは本当の所有とは言えず、一人よがりの思い込みにすぎないというハンロン<sup>①</sup>がきつと出ると思う。だが現実の所有にしたところで、少しキボ<sup>②</sup>が大きくなれば金や品物にしても使い切れなくなるし、土地にしても見て廻ることすら出来なくなるから、何かを持っていると思うことと、実際に持っていることの違いは殆ど無くなってしまう。

このような所有感の拡大プロセスの極限として、この地球はすべて私のものだという意識に到達するわけだ。自分の大学にいながら、目の前の空カンやゴミに対して無関心でいられるのは、大学が自分のものという意識がないからだ。つまり欲がなさすぎる。欲が小さすぎるのである。

私たち人間の毎日の生活は、殆どが習慣と惰性<sup>\*だせい</sup>で動いて

いる。何か新しいことを始めた当初はやたらと疲れるが、馴れてくればそれが苦もなく出来てしまうことは、誰でも経験することだ。

私が世界を自分のものだと思えば、万事気楽にやれるな<sup>ど</sup>と言うと、そんなこと出来て堪るか<sup>たま</sup>と反撥<sup>はんぱつ</sup>する方が多いと思う。しかしその気でしばらく努力して続けている内に、頭でいちいち考えて行動するダンカイ<sup>③</sup>をすぐ通り越して、体の方が新しい考えに馴れてしまい無意識の習慣になるから、初め思ったよりカンタンにやれてしまうものだ。

私は何年前、モスクワに三か月ほど滞在した時、地下鉄の駅からアカデミーホテルまでの帰り道、しばしばうっかりと落ちていたカンやビンを拾ってしまい、自分でも苦笑したことが何度もある。拾った物をどう始末したらよいのかの勝手も分からないのに、**《 I 》**的に拾ってしまった。癖<sup>くせ</sup>とは恐いものである。

(中略)

私が毎夏を越す長野県の町は、自然に恵まれた広大な町の中に場所がない(?)と言って、ゴミをわざわざ隣町の処理場に運び、大金を出して始末して貰っている。ところが町の人の中には、庭の落葉を掃いて大きなビニール袋

にいくつも詰めて、ゴミ収集車に持って行かせる人がいるかと思えば、刈った芝や木の枝を山と出す人もいる。

私はこのようなことを見るたびに、大都会と違って、広い庭や空間が充分あるのに、ちよつと穴を掘って入れるか、それが出来なければ庭の隅に積んでおくだけで、ほとんど土に戻るものを、どうして次々と難問を生み出すゴミとして出すのかと考えてしまう。

ある時、このようなことを知り合いの人に話してみたら、でもゴミ処理の費用は私たちの納める税金に入っているのだから、出さなきゃ損ですよと言われて、なるほどそういう考えもあるのかと感心した。人様々とはよく言ったものである。

大切なことは、私一人だけがやっても意味がないとか、たった一人の力で世の中の大きな流れを変えることなど出来はしないなどと、《Ⅱ》的にならないことだ。現在の社会が全体として向っている方向、社会が毎日生み出している環境汚染や資源の浪費は、結局のところ私一人がいかがと思う極く普通の人が集って作り出していることを忘れてはいけない。

いま多くの日本人は、自分の日常生活が贅沢極まりない

ものだとは感じていないと思う。ところがそのような普通の人が集って人口一億二千五百万の日本という国にまともだと、それは世界一の豊かで贅沢な国、外国の人々から羨望の目で見られる消費大国になってしまっているのである。

だからこそ私一人ぐらいなどと、自分の力を過小評価してはならない。自分を巨大な社会の片隅にいる無力でちっぽけな存在と思うことは、とんでもない間違いなのである。ひとりがすべての元なのだ。自分が変れば社会も変わる、自分は社会に対して能動的に働きかける力があるのだと、自分の力に自信を持つてかまわないのだ。いや持つべきなのである。

よく人は、まわりの人みんながやっているのだから、自分一人がどうこう言っても始まらないなどと言う。私はこのような考えほど、矛盾した考えはないと思う。誰でも自分が愚か者だとは思っていないだろう。人間には⑤ジソンの心がある。人から良く思われたいのは人情であろう。それなのに、自分がよくない、正しくないと思うことをみんながしているというだけで、自分までがその人々に加担して、愚か者の仲間入りをするのはおかしいではないか。

他の人たちは馬鹿だからあのようなことをするのも仕方

ないが、私は愚かでも馬鹿でもないから、そんなことはしないというのが、首尾一貫しゅびいっかんした考え方というものである。

(鈴木孝夫『人にはどれだけの物が必要か』による)

【注】

\*公徳心——社会で生活する上で、一人一人がもつべき道

徳心。

\*他利的——他人の幸福を第一に考える状態。

\*プロセス——何かが進んでいく順序。過程。

\*惰性——なかなかやめられない習慣。

\*人様々——人によって、いろいろな考え方があるということ。

問一 〔 1 〕・〔 2 〕にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし      イ だから      ウ つまり

問二 A にあてはまる最もふさわしいことを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の家にまざる場所はない      イ 自分の学校は自分の家と同じだ

ウ 自分の学校なら何をしてでも自由だ      エ 自分の家よりも学校の方が落ち着く

問三 ——線部B「もっと「欲深くなれ」とあるが、「欲深くなる」とはどのようなことか、文中より、解答欄とくに合う形で十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 — 線部C「世界を自分のものだと思えば、万事気楽にやれる」とあるが、ゴミの話でいえば、(1)「気楽に」とはどういうことか、また、(2)「やれる」とは何をすることなのか、説明しなさい。

問五 ≪ I ≫・≪ II ≫に当てはまる最もふさわしいことばをそれぞれの語群の中から選び、記号で答えなさい。

I ア 意識           イ 計画           ウ 反射           エ 批判

II ア 感情           イ 受動           ウ 消極           エ 積極

問六 — 線部D「このようなこと」とは、どのようなことを指しているか、説明しなさい。

問七 — 線部E「消費大国になってしまふ」という表現には、筆者のどのような考えが表れているか、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本が消費大国になれば、非常に名譽めいよで喜ばしいことである。

イ 日本が消費大国になるのは自然で、一人一人が意識する必要はない。

ウ 日本が消費大国だった時の経験から、環境について学ぶべきである。

エ 日本が消費大国だったのは過去の話で、これ以上心配しなくてもよい。

問八 — 線部F「愚か者の仲間入りをするのはおかしいではないか」とあるが、筆者の言う「愚か者」とはどのような人のことか、説明しなさい。

問九 〜〜線部①〜⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

